

第26回長野市公共施設適正化検討委員会 議事要旨	
開催日時	平成29年10月3日(火) 15:00~16:30
場 所	長野市役所第一庁舎5階 会議室151
出席者	[委員] 松岡委員長、神田副委員長、太田委員、片山委員、清水委員、西堀委員 [事務局(公共施設マネジメント推進課)] 久保田総務部長、望月総務部次長兼公共施設マネジメント推進課長、村上総務部主幹兼公共施設マネジメント推進課長補佐、柳澤公共施設マネジメント推進課長補佐、小林公共施設マネジメント推進課係長、渡辺公共施設マネジメント推進課係長 [都市整備部] 池田都市整備部公園緑地課長、平出公園緑地課長補佐
議 事	(1) 城山公園の再整備について (2) 公共施設マネジメント推進について ・公共施設マネジメント出前講座 ・地区別市民ワークショップ ・芋井地区公共施設整備検討委員会 (3) その他

【次第】

- 1 開 会
- 2 委員長あいさつ
- 3 議 事

【審議事項】

- (1) 城山公園の再整備について
- (2) 公共施設マネジメント推進について
 - ・公共施設マネジメント出前講座
 - ・地区別市民ワークショップ
 - ・芋井地区公共施設整備検討委員会
- (3) その他

- 4 閉 会

【開 会】

委員長あいさつ

〔松岡委員長からあいさつ〕

議 事

(1) 城山公園の再整備について

〔資料1について公園緑地課より説明〕

委 員 公園内の巨木(ヒマラヤスギ)は伐採するのか。残すべきでは。

公園緑地課 伐採するか未定である。地元の第二地区などからは、残すべきとの意見だけでなく、暗くなり防犯上問題、冬にツララが落ちて危険といった意見もいただいている。

委 員 城山公園は歴史も古く成熟した公園だと思う。自然との共存が大切ではないか。

公園緑地課 今後、様々な意見を聞きながら対応していく。

委員 城山公園は「横山城」の跡と言われているが、現状何も残っていない。

公園緑地課 今後、公園を再整備するにあたり文化財の発掘等にも配慮していく。

委員長 今回の整備は、文化財としての価値を見直すチャンスでもある。

委員 城山公園は善光寺に隣接しており、御開帳の観光客などと相乗効果が得られるよう、周辺道路も含めた善光寺との連続性に配慮した一体的な整備が求められる。当然検討していると思うが、善光寺の協力も得ながら再整備を進めて欲しい。

委員 城山公園と言えば桜、お花見のイメージが強い。近年桜が減っているので、再整備にあたり桜の公園というイメージを残して欲しい。

委員 花見小屋というのも長野市ならではのもののようだ。蔵春閣あたりの眺望も素晴らしい。それらを利用して立体的な活用も考えるべき。公園内の建物は無くすのだろうが、見て、行って気持ちがなごむ公園にして欲しい。

事務局 城山分室（旧NHK）は既に老朽化しており、平成30年度中には入居団体も移転して廃止の予定である。

委員長 現在の検討は、県立美術館の周辺が先行している。その他のエリアの施設については、今後2年ほどかけて、どうするか検討していく予定。

委員 この公園の弱点は駐車場。いくら良い公園を整備しても駐車場が無い公園は人が集まらない。

公園緑地課 駐車場は勿論、周辺の道路も含めて、公園利用者等の「交通」についても対策が必要と考えている。

委員長 駐車場というハード面、ぐるりん号等のソフト面、なかなか難しいが交通について両面からの検討が必要。加えて、地元の区長さんからは、公園は昼間だけではなく、夜間の防犯面の配慮が必要であるとの意見をいただいている。公園の植栽も建物も、様々な面から考える必要がある。

公園緑地課 いただいたご意見を参考に進めてまいりたい。

(2) 公共施設マネジメント推進について 〔資料 2-1～4-2 について事務局より説明〕

委員 出前講座で出された意見を見ると、ワークショップに対する否定的な意見が非常に多い。個人的な温度差が当然あるだろうが、地域的な温度差はあるのか。

事務局 合併地区などに比べて、旧市内には公共施設が少ない地区もあり。これ以上減らしようがないという発想はあると感じている。はじめは否定的でも、説明して理解をいただきワークショップ開催に至る地区もあり、なかなか理解いただけない場合もある。

- 委員 住自協の役員さんは高齢者が多いと思うが、理解度はどうか。
- 事務局 長年地域の活動に関わってきた方々なので、マネジメントに理解をいただくのが大変な場合もあるが、理解いただけるように説明している。
- 委員 ワークショップにも時間がかかると思う。
- 委員長 出前講座やワークショップなどやりながら、市民と情報共有していくことが必要であり、理解をいただきながら地区に入っていくことが必要。
- 事務局 人口減少時代、税収が減るといった、今までにない時代を迎えた中の取組である。地区別にワークショップを3年で開催することを目標としているが、無理に開催しても良い議論はできないと考えているので、地区の理解を得るよう努めていく。
- 委員 出前講座の意見を見ると、時代が変わってきた状況でマネジメントが大変な取組だということが良くわかる。ワークショップも良い取組だと思っていたが、事務局は大変だと思う。進め方も配慮が必要だ。
- 委員 以前からこの委員会の中で議論になっているが、市民もマネジメントの総論には賛成だが、いよいよ各論になると反対意見が出てくる。ワークショップは、情報共有には大きな効果があるが、合意形成に至ることは難しい。出前講座の意見の中に、予算化できなければワークショップで話し合ってもムダという声があり、考え方としては一般的なものだろう。
- 始めた以上は市内全地区でワークショップを開催して、公共施設に限らず地区の状況は様々であるので、行政がしっかり状況を把握する必要がある。
- 市の施策として全地区均等にはできないのだから、いずれ市は厳しい決断もしなければならぬ。その前の段階で情報共有を図り、地域の声を聞くワークショップということだと思う。
- 委員 感情の問題がある。理屈では理解しても感情では納得できない。
- 委員 公共施設の見直しが生活に影響が出る、切実な問題になる場合もある。
- 委員 ワークショップの中で、地域施設と広域的な施設の取り扱いはどうしているか。
- 事務局 地区内にあるものは広域的な施設であっても、一律にワークショップの検討対象から除外はしていない。芋井地区で社会体育館について、地元としては廃止も構わないという提言だったが、それも一つの考え方。南部図書館については、地域の核となる施設にしたいという地元の強い思いがあってワークショップで議論された。ただし、ワークショップの中で、広域的な施設については地区の皆さんの意見だけでは決められないということを説明している。
- 委員 これからの再配置検討の中で、今ある施設が地区から無くなる、他地区に移転することもあり得る訳で、ワークショップが終わった後に改めて協議することになるのではないか。

事務局 ワークショップは結論を出す場ではなく、自由に意見を出し合っていていただき、地域の声を聞く場にしている。具体的な再配置にかかる地元との協議は、次のステージになる。

委員長 難しいことだが、新しい時代を迎えて、手探りでも、やっていかなければ仕方がないことである。インフラ施設などは、学術的な研究より現場の方が先に進んでいる。ワークショップも地区の実情に合わせてやっていくしかない。

委員 今思うに、芋井地区がある意味特殊な状況だった。ワークショップも非常にうまくできた。あれが他地区でもできる訳ではない。地区の声をよく聞きながら、と同時に、聞きすぎても良くない。もっと施設を作りたいという意見も出るだろう。地元の感情に引っ張られてはだめだ。

委員長 今までの増やす時代は、市が計画を作って説明会で、説明のついでに意見を聞くやり方だった。減らしていく時代なので、まず地区に入って行って、地元の声を聞くことが必要だと思う。

委員 この出前講座の意見のまとめは、庁内や各地区に説明しているのか。

事務局 ホームページで公開しており、要点のみだが住自協の理事会でも説明している。

委員長 様々な情報を発信して共有していくと、みんな運命共同体だということが少しずつ分かってくる。

委員 ワークショップ開催の意図するところは何か。

事務局 計画策定前の段階で、市民と行政が公共施設について一緒に考えること。まちづくりやにぎわいづくりの視点で複合化等を考え、自由に意見を出し合っていていただき、再配置検討の参考にするものである。なお、結論を出す場ではないので、ワークショップ開催の後に、ワークショップで出された意見を受け止めて、どう解決していくかという課題に直面している。

委員 市の意図するところをしっかりと説明する必要がある。

委員 意見を戦わせるためには土俵が必要だ。ワークショップは一つの土俵づくり。事業化できるかどうかは予算もあり、必ず実現するものではないが、意見を言う場があるということは住民にとっても貴重なことである。

自分がワークショップに参加してみて、そういった場に参画する方の中には、地域の声をまとめて行く力がある方がおられるなど感じたところである。

自分の意見がそのまま実現しなくても、市は自分の意見も聞いてくれたのだと感じることで、住民と市の信頼関係の構築にも役立つと思う。

事務局 ワークショップ開催の始めには、マネジメントの総論について説明し、ワークショップの目的等についても理解いただけるよう説明している。篠ノ井は図書館が中心になったが、朝陽地区は支所・公民館が議論の中心になっており地区によって様々な状況である。公共施設マネジメントのワークショップではあるが、根底には地域のまちづくりという考えがあって議論をいただいている。

委員 ワークショップの開催後、市としての受け止めや、その後の検討の状況等をアウトプットする必要はある。

委員長 市民の生活はハード面とソフト面の両方で成り立っている。公共施設のハード面が議論の中心であるが、ワークショップでは生活のソフト面についての意見も出てくる。その中で良いアイデアがあれば一つでも実現できると、より良いワークショップになる。

委員 ワークショップが一通り開催された段階で、それぞれの地域の実情に応じた、長野市全体の公共施設マネジメントの方向性を出すことは非常に大きな課題になる。我々適正化検討委員会の役割、責任も重いと思う。

事務局 地域施設はワークショップの議論が中心であるが、広域的な施設は全市的な検討が必要である。赤字の商工観光施設などが想定されるが、広域的な施設については、公共施設適正化検討委員会の場で議論をいただくことになると考えている。

委員長 スパイラルの議論もあったが、製氷を休止する意見をまとめて、後は知らないということではなく、市も適正化検討委員会としても、いろいろな人たちと連携して、これからのことを考えて行くことが求められている。産官学なども含めて、知恵を出し合っていくということだと思う。

(3) その他

〔資料 5-1～5-2 について事務局より説明〕

【閉 会】